

塩谷郡市医師会だより

Contents

- 1 塩谷郡市医師会第67回定時総会開催
- 2 第2回役員会報告
- 3 学術講演会報告
- 4 平成26年度郡市医師会行事予定
- 5 シリーズ「塩谷医療史」15

Vol. 75

一般社団法人 塩谷郡市医師会
広報委員会

〒329-1312

さくら市桜野1319番地3

さくら市氏家保健センター内

TEL 028(682)3518

FAX 028(682)5760

塩谷郡市医師会第67回定時総会開催

平成26年4月12日(土) さくら市のホテル清水荘で第67回定時総会が開催された。総会に先立ち平成25年度第4回役員会が開かれ平成25年度の事業報告、貸借対照表、損益計算書等が承認された。定時総会の前に栃木県医師連盟塩谷郡市支部の総会が開催された。定款により選出された阿久津博美議長、村井信之副議長により議事が進められた。医師会員数101名中出席27名、委任状出席47名、計74名の出席で定足数充足が確認されたことより第67回定時総会の成立が告げられ、その後に平成25年度に物故された黒須病院の三品陸人先生、谷仲医院の谷仲昭夫先生に黙とうがささげられた。山田会長挨拶の後、岡副会長より会務報告があり議事に入った。

第1号議案「平成25年度塩谷郡市医師会事業報告並びに収支決算の承認を求める件」

第2号議案「平成25年度塩谷郡市医師会貸借対照表及び損益計算書の承認を求める件」

第3号議案「平成26年3月31日現在財産状況の報告について」

の3つの議案は関連した議案・報告であることから一括の審議を行うことが承認された。

山田会長が第1号議案を、会計担当の池田理事が第2号議案および第3号議案について説明した。第2号議案については江口監事から監査報告があった。質疑の結果、賛成多数で承認された。

第4号報告事項「平成26年度塩谷郡市医師会事業計画並びに収支予算の報告について」

山田会長から事業計画が、池田理事から収支予算の説明があった。

第5号議案「平成26・27年度理事及び監事の承認」

戸村選挙管理委員長から、平成24年4月7日第65回定時総会で理事定数が15名から10名に削減され、その定数に基づき理事及び監事選挙公示が行われた結

果、理事定数10名に対し10名、監事定数2名に対し2名の立候補となり、無投票当選となったことが報告された。理事・監事の決定に対し賛成多数で承認された。

ここで暫時休憩が取られ、その間別室にて新理事・監事による役員会が開催され、理事長(会長)、副理事長(副会長)が決められた。

総会再開後、**第6号議案**の平成26、27年度の理事長、副理事長及び**第7号議案**の栃木県医師会代議員・予備代議員の承認が行われた。村井監事から役員会において平成26、27年度の理事長は山田總氏、副理事長は尾形新一郎氏、岡一雄氏が、県医師会の代議員に山田總、岡一雄、阿久津博美の3氏、予備代議員に佐藤勇人、半田教、高橋雄二の3氏が選出されたことが報告され、総会出席者の賛成多数で承認された。



定時総会終了後に、懇親会が開催された。尾形新一郎副会長の司会で平成26年度入会の西川整形外科の西川晋介先生の紹介があり、新しい会員を交えて歓談が行われた。



塩谷郡市医師会ホームページ/メール	広報委員会編集部	医師会事務局
URL http://www.tochigi-med.or.jp/shioya/ メール shioya@tochigi-med.or.jp	岡 一雄 r2d2@msh.biglobe.ne.jp 尾形新一郎 ogata@o-ga-ta.or.jp	条川 kumekawa.shioya@gmail.com 高橋 takahashi@e-shioya.jp

平成 26・27 年度理事及び監事

理事 (10名)

山田聡 (理事長)、尾形新一郎 (副理事長)、岡一雄 (副理事長)、阿久津博美 (会計担当)、早川正道、手塚幹雄、植木雅人、高橋雄二、佐藤勇人、半田教

監事 (2名)

村井信之、仲嶋秀文

平成 26 年度第 2 回役員会報告

平成 26 年 5 月 19 日(月) 午後 7 時から医師会事務室で開催された。

出席者：山田会長・尾形副会長・岡副会長・阿久津・半田・高橋・植木・手塚・早川・村井・仲嶋



第 1 号議案 会長方針

山田会長から医療連携の強化や在宅医療の推進などの方針が示された。

第 2 号議案 塩谷郡市医師会及び栃木県医師会各種委員会委員長・委員の選任について

今年度から塩谷郡市医師会の各種委員会の委員長は基本的に理事が務める方針のもとに委員長が選任され、また従来通り 2 市 2 町の医師団から推薦された委員が了承された。以下に委員会と委員長名を記す。保険委員会 (阿久津博美)、研修・学術部会 (半田教)、研修・産業医部会 (森島真)、介護保険委員会 (尾形新一郎)、感染症対策委員会 (植木雅人)、裁定委員会 (戸村光宏)、医師会史委員会 (岡一雄)、広報委員会 (佐藤勇人)、選挙管理委員会 (後藤哲郎)、医療機能検討委員会 (山田聡)、社会活動委員会 (高橋雄二)、ABC 検討委員会 (山田聡)、塩谷地区おとな・子ども夜間診療室委員会 (山田聡)

注：規定により裁定委員会と選挙管理委員会は役員以外から選出

第 3 号議案 平成 26 年度年間計画について

別掲のように行事予定が示された。

第 4 号議案 塩谷郡市医師会主催正副会長懇談会について

今年度は本医師会が栃木県郡市・大学医師会正副会長

懇談会の当番幹事にあたるため、11 月 1 日(土) に塩谷町の星ふる学校くまの木で開催される予定が示された。

注：正副会長懇談会は栃木県内の郡市医師会・大学医師会の交流を目的に毎年一回各当番地区で開催されており、10 年に一度当番幹事が回ってくる。

第 5 号議案 新たな財政支援制度 (基金) の事業計画について

今年度国は医療・介護サービスの提供体制改革を推進するため新たな財政支援制度を創設し、各都道府県に基金を作り事業を実施することになり、各郡市医師会等が対象事業の提案を行うことになった。本医師会は在宅医療・介護サービスの充実のための事業として塩谷医療圏在宅医療推進事業を提案することになり、その説明と質疑が行われた。提案の採用の可否は 9 月ごろとなり、採用された場合の交付の決定が 11 月、事業実施は 12 月になる予定。

学術講演会 1

「過活動膀胱診療の問題点と解決策」

日時：平成 25 年 11 月 26 日

講師：獨協医科大学病院 排泄機能センター長

山西 友典先生



塩谷医療圏には病院の勤務医や非常勤医を除けば泌尿器科の開業医はいない。日常遭遇することが多い泌尿器疾患の診療は開業医として苦勞するところである。今回は黒須病院で週一回非常勤の泌尿器科医として地域医療に貢献していただいている山西先生が、過活動膀胱の診療のきもについて分かりやすく講演していただいた。

須病院で週一回非常勤の泌尿器科医として地域医療に貢献していただいている山西先生が、過活動膀胱の診療のきもについて分かりやすく講演していただいた。

学術講演会 2

小児科診療医研修会(栃木県委託事業)「小児救急の現状について～臨床から教育まで～」

日時：平成 25 年 12 月 17 日

講師：国際医療福祉大学塩谷病院 小児科医長

嶋岡 鋼先生

塩谷地区で行っている休日・土曜日夜間のおとな子ども診療室の小児科診療の知識を高めることを目的に行われた講演会



だった。講師の嶋岡先生は久しく小児の入院が困難であった塩谷病院に転任されてきた若手の小児科のホープで、嶋岡先生の加入により塩谷病院の小児科医の数が増加し小児の入院が可能になった。今後の診療に大変ためになる講演であった。

学術講演会 3

主治医研修会(栃木県委託事業)「認知症高齢者の診かたと主治医意見書の書き方」

日時：平成 26 年 1 月 14 日

講師：国際医療福祉大学塩谷病院高齢者総合診療科
部長・教授 岩本 俊彦先生

主治医として認知症高齢者の診かたのポイントと主治医意見書の書き方についてためになる講演会であった。



学術講演会および新年会

「骨粗鬆症の治療を加味した地域連携パスの導入に向けて」

日時：平成 26 年 1 月 24 日

講師：日本赤十字社那須赤十字病院 第一整形外科
部長 吉田 祐文先生



整形外科の立場から骨粗鬆症の治療と地域連携パスの導入について、大変面白くユニークな講演を聞くことができた。

講演後は講師の吉田先生も加わり、新年会を兼ね懇親会が行われた。

平成 26 年度郡市医師会行事予定

平成 26 年

- 4 月 12 日(土) 定時総会および第 1 回役員会
- 4 月 22 日(月) 第 1 回総務会
- 5 月 12 日(月) 臨時総務会
- 5 月 19 日(月) 第 2 回役員会
- 7 月 25 日(金) 学術講演会・納涼会 (ホテルマイステイズ宇都宮)
- 9 月 8 日(月) 第 2 回総務会
- 10 月 6 日(月) 第 3 回役員会
- 11 月 1 日(土) 正副会長懇談会 (塩谷町)
- 11 月 9 日(日) 市民公開講座 (さくら市)

平成 27 年

- 1 月 23 日(金) 学術講演会・新年会 (ホテル東日本宇都宮)
- 2 月 16 日(月) 第 3 回総務会
- 3 月 9 日(月) 第 4 回役員会
- 4 月 11 日(土) 第 5 回役員会
第 68 回定時総会

平成 26 年度学術講演会等予定表

- 6 月 10 日(火) 糖尿病関連
- 7 月 25 日(金) 納涼会を兼ねた講演会
- 9 月 9 日(火) 痛風・高尿酸血症関連
- 9 月 18 日(木) 産業医研修会
- 10 月 7 日(火) 予備日 (テーマ未定)
- 11 月 9 日(木) 産業医研修会
- 11 月 18 日(火) 喘息関連
- 12 月 9 日(火) 予備日 (テーマ未定)
- 1 月 23 日(金) 新年会を兼ねた講演会
- 2 月 17 日(火) めまい
- 3 月 10 日(火) 予備日 (テーマ未定)

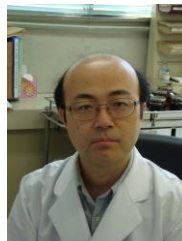
注：5 月 30 日時点での予定なので、日程やテーマなど変更する場合があります。

新入会員紹介

きうち産婦人科医院
桑田吉峰先生



西川整形外科
西川晋介先生



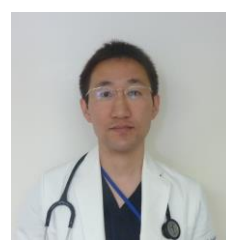
黒須病院
西 悠先生



きうち産婦人科医院
山田哲夫先生



尾形クリニック
米田尚弘先生



黒須病院
浦 一美先生



五味淵医師の見たスペインかぜ（1）

毎年流行するインフルエンザ A 型は、変異しやすく、時に病原性の高いものが出現することが知られている。それが新型インフルエンザであり、現在その対策のために特効薬の備蓄や行動計画が策定されている。

有史以前からおそらく何回も新型インフルエンザは出現して人類を脅かしたと考えられるが、科学的に証明された新型インフルエンザの世界的流行（パンデミック）の中で、最大で最悪の流行は 1918（大正 7）年から 1919（大正 8）年にかけて世界を震撼させたいわゆる「スペインかぜ」である。

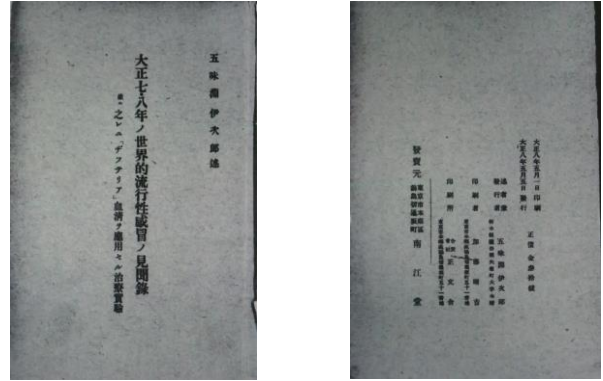
スペインかぜは 1918 年 3 月、アメリカのカンザス州ファンストン基地での流行が先ぶれとなり、5 月から 6 月にかけてスペインで流行する。スペインでの罹患者数が約 800 万人もいたが、死者数は極めて少なく数百人レベルであった。この後、7 月から 8 月にかけて流行地は第一次世界大戦中であった西部戦線に移ってゆく。スペインにとっては不名誉なことであるが、当時第一次大戦に参戦せず中立国であったために国内の報道管制がなく世界中にインフルエンザの大流行が報じられてしまい「スペインかぜ」という名称がつけられてしまったのである。

さて、西部戦線では兵士間に流行したインフルエンザは軍隊から一般市民に瞬く間に流行していく。またアメリカやヨーロッパ以外の地域、日本を含むアジアでも春から夏にかけて流行し、世界を一周するが、実はこの時点では病原性はさほど高くなかったのである。ところが 8 月後半から秋にかけて病原性が変化し、多くの犠牲者を出すようになり、その流行は翌年に渡って繰り返され、スペインかぜは当時の世界の人口の 3 割に当たる 6 億人が罹患し、3000-4000 万人の死者を出す史上最悪の新型インフルエンザの流行となったのである。日本では 2300 万人が罹患し、39 万人が死亡したとされている。

前置きが長くなったが、このスペインかぜの流行の記録を矢板町（現矢板市）の五味淵伊次郎医師が書き残していたのである。政府や公的機関の報告書でなく一開業医が書き残した記録は世界的にも非常に珍しく、もちろん日本では唯一のものである。

五味淵医師が書いた「大正七・八年ノ世界的流行性感冒ノ見聞録」は大正 8 年 5 月 5 日に南江堂から出版され、現在国会図書館に保存されている。

今回は五味淵医師の記録からこの未曾有の新型インフルエンザの世界的流行の状況と当時の一開業医の医療行為について 2 回に分けて紹介する。



五味淵伊次郎著「大正七・八年ノ世界的流行性感冒ノ見聞録」

五味淵伊次郎は日本医籍録(昭和 13 年、第 12 版)によると明治 19 年 11 月 30 日矢板生まれ、日本医学校を卒業、明治 44 年医術開業試験に合格して明治 45 年矢板町木幡で開業、大正 11 年に扇町に新築移転したことがわかっている。しかし、残念ながら、その子孫は医療に携わらなかったため、五味淵に関する資料はほとんど現存していない。

五味淵がいわゆる「スペイン風邪」に遭遇したのは開業して 7 年、33 歳の時で、医師として気力・体力とも充実した脂が乗った時期だったと考えられる。五味淵は記す。

「秋季落葉の候に入るや飛電新聞紙上にスペイン感冒の世界的大流行を報ず。欧州に米大陸に南洋に東亜に頻々たり拾数日を出でて我国土に侵襲しまもなく東京に流行を報じ貳旬（20 日）ならずして我栃木県矢板町地方にも伝染せり」

旅客機が一般的でなかった時代に、「スペイン感冒」と呼ばれた新型インフルエンザは瞬く間に世界中に流行していったことがわかる。そして矢板には 10 月 26 日矢板農林学校生徒が東京の遠足から帰ってきて、さらには矢板駅員、茨城県方面から帰ってきた役場職員、秋季旅行から帰った小学生などが次々とスペインかぜに罹り、学校の閉校（休校）が相次いだ。ところが不思議なことに、この時点では重症化したものはなく、11 月中旬までは死者がなかったと五味淵医師は報告している。では、スペインかぜはいつからその荒々しい本性を現し、人々を恐怖に陥れたのであろうか。この続きは次号で。